

アメリカ時代のセルゲイ・ラフマーニノフの音楽構想及び楽曲構成観 —— 諸稿の比較研究を通して ——

国立音楽大学大学院音楽研究科音楽研究専攻 博士後期課程2年（助成時）
同上 博士後期課程3年（現在）
中原 豪志

1. 研究の目的と背景

本研究は、ロシア生まれの作曲家セルゲイ・ラフマーニノフ【以下、SR】（1873–1943）が祖国からの亡命後、1918年に生活の拠点をアメリカに定めてから創作した作品の自筆資料に焦点を当てたものである。自筆資料の実態を整理し、比較分析することで創作過程を踏まえながら音楽構想を考察していく。

当該作曲家の自筆譜の所在はロシア、アメリカを中心に各所に点在している状況である。そのため、先行研究も少なく、アメリカ時代の自筆譜研究は Cannata (1999)、ロシア時代の作品はロシア音楽出版社による批判校訂楽譜（2005; 2006）に留まっており、事実上停滞している。より広義での楽譜比較領域においては、出版された楽譜（初版と改訂版など）の同異に注目したものが中心であり、未出版の楽譜を扱ったものは限定される。また、アメリカ時代に書かれたピアノ独奏曲の自筆譜の多くは、アメリカ議会図書館【以下、LC】でアーカイヴ化されているにも拘らず、その内容の多くが未だに明らかにされていない。

発表者は2023年度の研究（中原 2024）において、SRのアメリカ時代のピアノ独奏曲《コレッリの主題による変奏曲》Op. 42（1931）【以下、Op. 42】に関わる3つの資料の画像複写データをLCより取り寄せて比較検証しており、SRの自筆譜研究はアメリカ時代のピアノ作品においてもまた有用である可能性を捉えた。そこで、より詳細な分析を進めるため2024年8月にLC現地において一次資料調査を行った。

2. 研究方法・結果

2-1. LC所収の自筆諸稿の実態

本研究では、まずLCのセルゲイ・ラフマーニノフ・アーカイヴに収められているSRのピアノ作品に関わる全ての自筆資料の内容を把握すること

から始めた。Cannataの先行研究では自筆譜には3つの段階があると整理されている。具体的には、(1) 断片やアイデアが鉛筆でメモされた「スケッチ」、(2) 楽曲の一部または全体の骨子が鉛筆で書かれた「草稿」、(3) 明瞭にインクで書かれ、出版に向けた校正譜としても使用される「清書譜」である【図1】。

LCにおけるSR自筆資料の状況は、作品によって様々であった。Op. 42やJ.S. バッハの《ヴァイオリンのためのパルティータ》ホ長調のピアノ編曲は複数の自筆資料が現存し、一方でピアニストにとって重要なレパートリーである《愛の喜び》編曲やピアノ・ソナタ第2番（改訂版）などは自筆譜どころか印刷譜も所蔵されていない。アーカイヴで確認できた作品に関しては自筆諸稿を概観し、内容を整理した。例えば、SR晩年の1940～41年の6/7稿は鉛筆で書かれているものの、初版のレイアウトと一致する組版指示が書かれており、これがそのまま版下のための校正譜として使用されていたことが明らかである。インクよりも不明瞭であることが、初版の中で音の誤植やタイとスラーの区別に不正確さを生じさせた要因の一つと考えられる。今後の研究で校訂報告を行うなど、演奏実践に向けた課題が残されている。

2-2. Op. 42の諸稿比較から見る楽曲構成

LCには、Op. 42に関連する3つの稿が存在する。(1) 鉛筆で書かれたスケッチと草稿が1冊のノートブックに混在する作曲ノート、(2) 黒いインクで書かれ、色鉛筆で組版指示の印が振られた自筆清書譜、(3) カール・フィッシャー社より出版された初版である。このうち(2) → (3)に大きな相違はなく、

【図1】SRの作品に関わる種々の楽譜と研究の状況



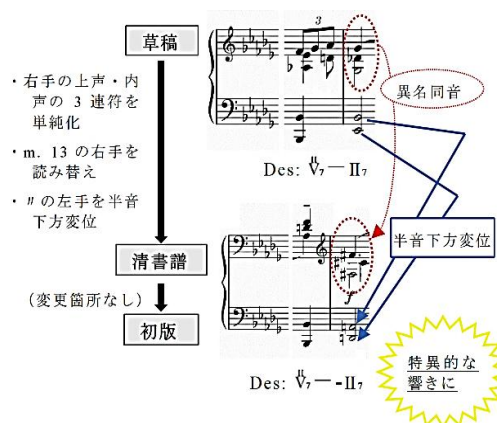
(1) → (2) の間に多くの変更、推敲がなされている。中原 (2024) は、(1) で各変奏のアイディアを書き出し、その後に変奏の順番を並べ替えたこと、他の変奏と同様にローマ数字で変奏番号が振られていた「XIII」の草稿は (2) 以降で「インテルメッツォ」となり、名前も楽想も変化したことを指摘している。

今回の現物調査を通して、(1) の作曲ノート中の草稿においても変奏番号が書き換えられていた事象が明らかになった。これは、当初「XX」としていた楽曲の最終セクションを「コーダ」に置き換えたことによって、変奏番号を1つずつずらす必要が生じたものと推察される。つまり、「主題」と「変奏(群)」から成る典型的な楽曲構成の中に取り入れられた「インテルメッツォ」および「コーダ」が示すところは、SR が創作・推敲過程で名称を変えた2つのセクションの「変奏ならざる」側面と言えるだろう。

2-3. Op. 42 の稿比較から見る局所的な構想の変化

諸稿比較によって明らかになった変化は、楽曲構成のみではなく、旋律や和声といった更に細かいレベルにも認められる。例えば、本楽曲の特徴の一つである中間部に位置し、主調から離れて主題回帰する第14変奏は、作曲ノートの中で既に構想されているが、和声進行が清書譜以降とは異なる。特に顕著となるのが当該変奏の後段である。第14変奏の13小節目では清書譜以降は Des-dur の-II₇ が出てくるが、この和音に進む展開は一般的な和声進行ではないため、特異的な響きをもたらす。この進行は主題にも現れず、本楽曲の主題借用元であるアルカンジェロ・コレッリのソナタ集 Op. 12-5 〈フォッリーア〉にも見られない。また、この箇所に対応する作曲ノートの草稿では2度調の D-T という別の進行であることから、SR が意図的に響きを変化させたことが分かる【図2】。

【図2】 Op. 42 の第14変奏 mm. 12-13 における稿変遷



2-4. Op. 42 と他作曲家との繋がり

発表者は LC において SR の自筆譜調査のほかに、彼の保有楽譜、SR と近い関係にあった音楽家の資料も調査した。上記 2-3 で確認した第13小節でIIを介するという展開は、主題にも〈フォッリーア〉にも現れないが、SR が本楽曲を献呈したヴァイオリニストのフリッツ・クライスラーが同時期に出版した《ラ・フォリア》編曲 (1927 出版) の第9変奏の中では Op. 42 と同様にIIを経過する進行が見られる。また、Op. 42 の第14、15変奏においては、旋律の動きにもクライスラーの先例の音楽要素との連関が認められる。これまで、クライスラーからの影響は示唆されるに留まっていたものの、両音楽家の関係性、クライスラー作品の要素が実際に Op. 42 に取り込まれたことを踏まえると、影響の可能性が高まったと言える。

3. まとめと今後の課題

発表者は SR のアメリカ時代におけるピアノ作品の自筆諸稿の実態を明らかにするという基礎研究から出発し、稿比較によって Op. 42 における楽曲構想が変化していった過程を詳細に捉えた。更に、借用主題に基づく変奏曲において、借用元の作曲家以外からも着想を得ていた一面も垣間見ることができた。

今後は、自筆諸稿の内容を全て解説・浄書し、より詳細な比較分析を行うことが必要である。また、SR の保有楽譜には SR の編曲作品との関連を示すものや、Nomachi Susumu という未特定の邦人作曲家による楽譜も存在する。亡命後の彼を取り巻いていた音楽コミュニティの調査も同時に進めていきたい。

参考文献 Rachmaninoff, Sergei. 2005; 2006. "Pieces II," "24 Préludes," "Etudes-Tableaux." In *Sergei Vasilyevich Rachmaninoff, Critical Edition of the Complete Works, Series 5 Works for Piano Solo*, vol. 16.2; 17; 18, edited by Valentin Antipov. Moscow: Russian Music Publishing.

Cannata, David Butler. 1999. *Rachmaninoff and the Symphony*. Innsbruck: Studien Verlag; Lucca: LIM Editrice.

中原豪志 2024 「S. ラフマーニノフの《コレッリの主題による変奏曲》における音楽構想——自筆作曲ノートの調査を通して——」『音楽研究：大学院研究年報』第36輯：167-183 東京：国立音楽大学